承国寺遺跡

編集 各務原市埋蔵文化財調査センター
発行 各務原市教育委員会
TEL(0583)83-1123
平成16年3月

承国寺遺跡発掘調査空中写真

承国寺遺跡について

承国寺(じょうこくじ)は、室町時代に建てられた臨済宗の禅寺です。正式には「南豊山(なんぽうざん)承国寺」といい、諸山(しょざん)という格式を有する幕府公認の寺です。承国寺は、鵜沼古市場町の大安寺川東岸に所在しましたが、戦国時代に廃寺(はいじ)となり今は残っていません。現在、寺があった場所は宅地や畑となっています。

平成8年に、承国寺の寺域と思われる場所を発掘調査しました。その手掛かりとなったのは、残されていた土塁(どるい)です。土塁は、土を盛り上げて作った塀で、堤防のような格好をしています。これは、承国寺を囲っていたもので、発掘調査を実施した地点が承国寺の北端であることを示しています。

発掘調査の結果、承国寺ができる前後の時代の遺物や遺構も出土しました。そこで、承国寺の時代を中心に長い歴史の足跡を残した遺跡という意味で、承国寺遺跡と命名しました。

土塁は、発掘調査の後に削平されましたが、大安寺川の西岸に現在も残る地点があります。川の東西に土塁が分断されているのは、河川改修工事が行われ、流路が少し変更されているからだと思われます。

遺跡の現況

現在も残る土塁

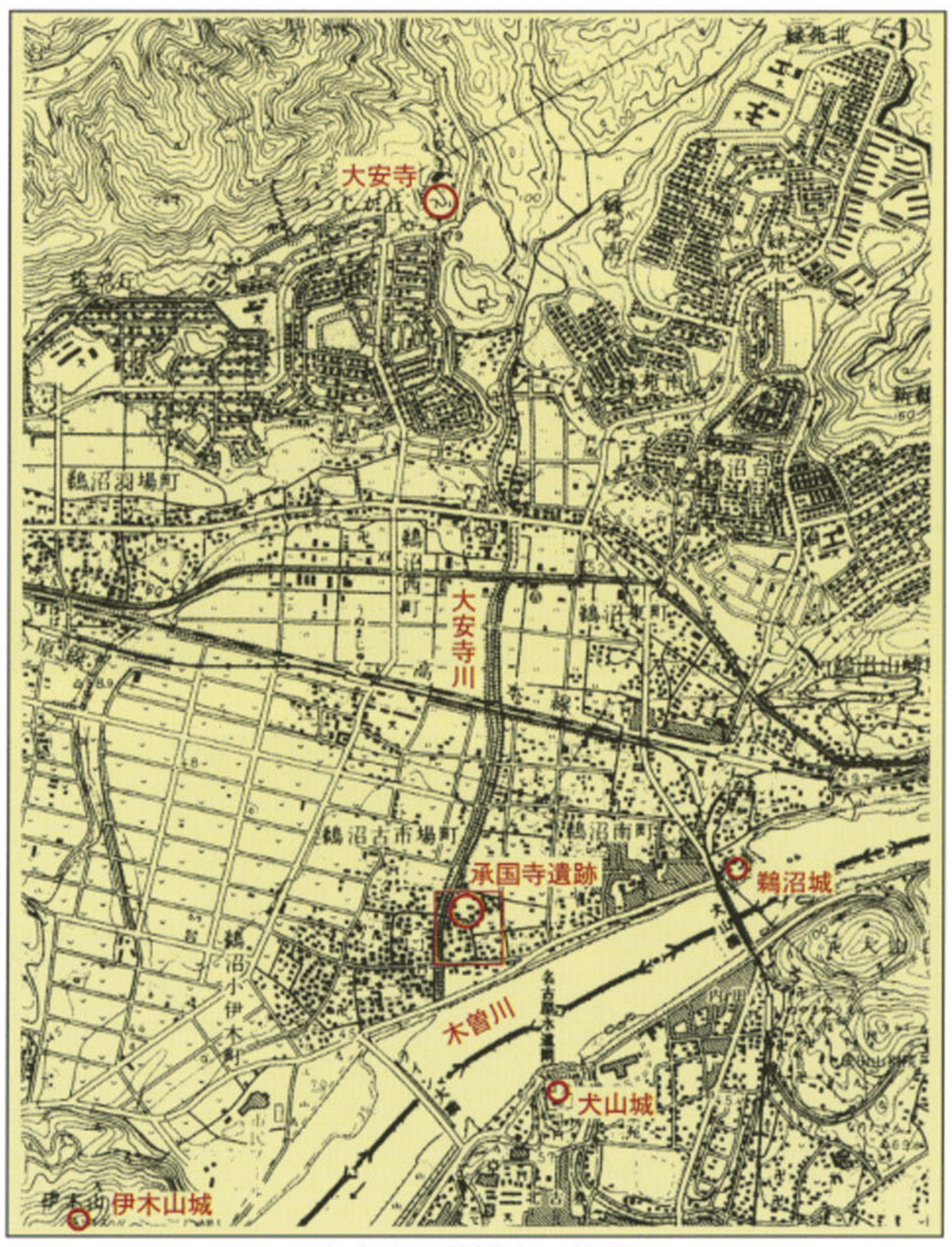
守護土岐氏と守護代斎藤氏

鎌倉時代に起きた承久の乱(1221年)では、美濃の武士達は敗者となった官軍(天皇方)に味方したために力を失いました。ところが土岐氏は、勝者である鎌倉方についたため、この後、建武の動乱期にも活躍を見せ、美濃国守護の地位を得るに至りました。土岐氏は、岐阜市下川手の革手城を本拠地として領国支配を展開しました。

土岐氏を補佐する守護代として大きな力を持ったのは斎藤氏です。斎藤利永は、革手城の防備のために旧加納城を築きました。土岐氏と斎藤氏は、美濃国の東端に位置した各務原とも深い係わりをもつようになります。

土岐氏は、禅宗を保護し雄大な寺院を構えて芸術や文化に大きな影響を与えました。六代美濃国守護の土岐頼益は、鵜沼大安寺町に済北山大安寺を建立します。応永18年(1411)のことです。大安寺は、当時と様子は大きく変わっていますが、現在も営まれています。この寺の境内には、土岐頼益と斎藤利永の墓があり、岐阜県指定の史跡として保護されています。

さて、大安寺のある場所から南へ流れているのが大安寺川です。この川が木曽川に注ぐ直前の場所に承国寺がありました。承国寺は、頼益の子である土岐持益が建立しました。その正確な年代は不明ですが、持益が守護を務めた晩年に建てたと思われることから、1450年頃と考えられます。



大安寺と承国寺の位置

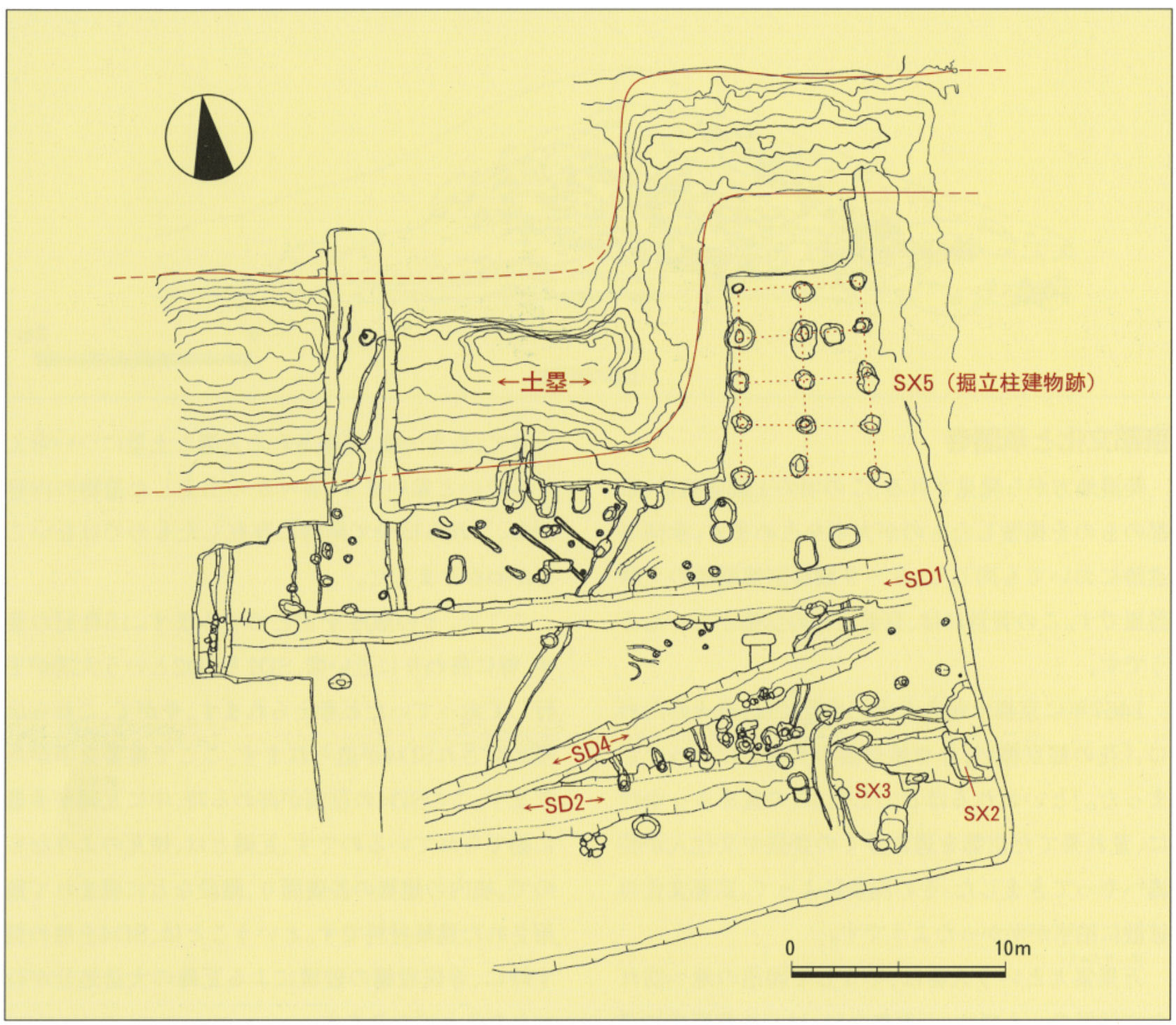
発掘された遺物

発掘調査の結果、多くの遺構と共に1万点以上の遺物が出土しました。遺物は、縄文時代の土器や石器から明治時代の陶磁器に至るまで様々です。なかでも、中心となるのは室町時代から戦国時代にかけてのもので、承国寺との関係が深いものです。

承国寺の時代の遺物には、土師器皿、山茶碗、陶器があります。土師器皿とは、「かわらけ」とも呼ばれる素焼きの皿です。普通の食器と違い、特別な儀礼や宴会の時に、ただ一度だけ使用して捨てられてしまう器です。内面に煤やタールが付着したものもあり、明かりを灯す灯明皿として使用されることもあったようです。土師器皿には大小の規格サイズがあったようですが、最大のものは直径19cm、重さ500gを有します。この大きさの土師器皿は承国寺特有のもので、特別な身分の客を招き、盛大なもてなしを行った証なのかもしれません。

土師器皿の出土状況

土師器皿の規格



承国寺遺跡遺構分布図

発掘された遺構

発掘調査で検出された遺構は土塁、溝、土坑(穴)、柱穴などです。

土塁は、高さ2.64mを測ります。現在は上の方が崩れていますので、当時はもっと高かったと思われます。土塁の断面を観察すると、大小の河原石が多く積まれていることがわかりました。この石は河原から運んできたものではなく、この土地の少し深い地層に埋まっているものです。土塁の盛土の仕方を観察すると、外側(北側)から一方的に盛り上げていることがわかります。外側を掘り起こした土で、土塁を盛ったのではないかと思われます。

土塁は、後世に削られてしまっている部分もありますが、まっすぐに伸びず途中でクランクしているのが特徴です。その部分の内側には、SX5という建物跡が確認されました。この建物は、土塁に付属する施設であったと思われます。

溝の中で注目されるのは、SD1、SD2、SD4という溝です。この溝は、幅1.2～2.2m、深さ25～75cmという大型のものです。溝の中には、土器などが大量に埋没していました。なお、SX2やSX3という土坑にも、多くの土師器皿がまとめて埋められていました。

各遺構から出土した遺物には、考古学の研究でおおよその年代が与えられています。つまり、遺物をよく調べることで、遺構が作られた年代や順序もわかり、承国寺がどのように変化していったかを検討することができるのです。

土塁の断面図

京都文化と承国寺

美濃地方から発見される、この頃の土師器皿は、京都のものを模倣したものが大半を占めます。承国寺遺跡においても同じく、8～9割は京都模倣の土師器皿です。この背景には、京都文化の伝播があったようです。

1467年に京都で起きた応仁の乱では、戦火のために、「花の都京都が、今や狐や狼のすみかになってしまった。」といわれるほどでした。この乱をきっかけに、荒れ果てた京都を逃れ多くの貴族や文化人が美濃へやってきました。その現象によって、京都文化の拡散に拍車がかかったようです。

万里集九（ばんりしゅうく）という人物は、そうして鵜沼の地へ訪れた文学僧の一人です。万里集九は、はじめ承国寺に滞在しましたが、付近に梅花無盡蔵（ばいかむじんぞう）という庵室を兼ねた居宅を建て文学活動を展開しました。そして、庵室と同じ名称の詩文集『梅花無尽蔵』を代表とする多くの作品を作りました。集九のもとには、近辺の禅僧らも集まり、文学僧のグループ「鵜沼の友社」が結成されるなどの盛り上がりを見せました。

承国寺の最後

承国寺は、いつ頃運営されて、最後にどうなったのでしょうか。発掘調査の成果を合わせて検証してみたいと思います。

承国寺や梅花無盡蔵の様子については、詩文集や他の史料から伺い知ることができます。それによると、15世紀後半から16世紀の初め頃に承国寺の運営を見ることができます。出土した土器などの考古学年代を当てはめても、大きな矛盾はありません。

さて、もう一度、発掘された大溝と土塁につい考えてみたいと思います。各々から出土した遺物の内容から、これらは全て同時に存在したものではないことがわかりました。

ここで、その順序をまとめてみます。15世紀の後半、特に終わりに近い頃、SD1とSD2という大溝が平行して走っていたと考えられます。やがて、これらは埋め戻されSD4が造られます。ここで重要な事があります。このSD4の役割が終わる時、中に瓦磚（がせん）が多量に捨てられているのです。瓦磚とは、煉瓦のようなもので、境内の建物の基礎周り、階段などに組まれて使用された建築材料です。ということは、SD4を埋め戻す時に、寺院設備の破壊による瓦磚の大量処分が行われたことになります。

次に土塁についてですが、発掘調査の結果、その下にも溝や穴などの遺構があることがわかりました。このことは、土塁が新しく築かれたということを意味します。大溝も土塁も、承国寺の寺域を区画するものであったでしょう。すなわち、各大溝の配置が次々に変更されていって、最後に大型の土塁が築かれたということになります。SD4が埋められたのが、土器から見ておよそ16世紀の初め頃です。土塁が築かれたのは、その時だと思われます。

承国寺についての記録は、1520年代初めで途絶えます。その後、急速に衰え廃寺になったと言われています。この頃、世の中は戦国時代の後半に入り、各所で戦国武将が縄張りを張る緊張した時代に突入します。鵜沼城や伊木山城とともに、この承国寺も土塁という防御施設を構えた城砦に変貌していったのではないでしょうか。